『さわらび』から学ぶこと

関口はつ江

本書は著者、川崎千束先生が二十四年間勤められた東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園を退かれるに当って、先生の保育実践の成果と保育観人生観をまとめられたものである。保育の在り方、方法を細やかに記した保育のための指導書であると共に、著者の自伝の書でもある。

保育の場に在りながらとらえた幼児の姿、保育者としての心づかい、生活観がひとつひとつの出来事を通して述べられており、保育をするということが、こんなにも深い配慮のもとで、そして、深い喜びや哀しみにつながりながら行われるものであるのか、と目を見張る思いがする。全身保育に打ち込んで、保育をする者として生きることが、人間としての素晴らしい形成につながる事実を目のあたりにして、「保育」そのものの価値の高さを示す書としても大切な役割を果していると思う。

全部で十八章のうち、はじめの五章は幼児の姿と保育のしかたについて具体的な実践を記したものであり、六章から十六章までは著者の保育観を中心に海外の状況等も含めて、多角的に保育について述べ、最後の二つの章に自伝的なエピソードと書簡が載せられている。真に幼児のための保育を、と考えながらも、具体的な方策をもたずに悩んでいる保育者にとっては、本書の前半の保育の進め方、幼児とのかかわり方の事例は貴重な助言である。多

少の理論的な枠組の中でこれらがまとまって示されるなら、この上ない保育者のための指針となろう。

そこで、多分本書においては著書の望むところではないであろうが、もしできることなら、各部分を独立した書としてもまとめることができたら、尚一層与えられるものが大きいのではあるまいか。本書の保育にかかわる部分から学ぶところが大きいのであるが、読みすすむうちに、著者の素晴らしい人間性にふれ、その個人的、私的世界の中にひき入れられてしまい、ともすれば、自分の保育実践へと結びつける努力が失われるからである。

さて、本書を読まれた方にどこが最も心に残ったかと尋ねると、恐らく十人十色の答が返ってくるであろう。保育者は保育者なりに、それも経験の深さによって、母親は母親なりに、娘は娘なりに感じ方は異なろう。それ程までに、保育の、人生の、人間の様々な側面が深く、暖かくとらえられており、美しく的確なことばで表現されていて、どこを読んでも、そこはそこでひとつの世界を作っていて感銘深い。

例えば、保育の基本となるべきことが、冒頭、第一章「芽を育てる」に次のように鮮やかに示されている。

『……いかにもたどたどしくて指でも切りそうな子をみつけた。手伝うつもりでそーっと手を出すと、色紙をひいて、「ぼくひとりでする。お母ちゃんがねえ、なんでもひとりでしなさいって、いったの。」いそいで手をひいてホホウとこの子の顔を見直した。——ふと、おうちでやはり鼻の頭に汗をうかべて洗濯していらっしゃるだろう健康そうなお母さまの顔が浮んできて、思わず心たのしくなる。

赤ちゃんをおんぶしたふだん着

鼻の頭の汗

お母ちゃんが……言ったの

この三つを結びあわせると、手をやくほどのいたずら坊やではあるけれど、この芽の健全さがおもわれる』

と、まず子どもについて何をとらえるべきかが、

『慰めるつもりで、こんなことを言ってみたものの、"ああ明日にでも、赤ちゃんを歩かせてあげて、僕とお母さんと赤ちゃんの三人を、ダーッと三越の正面玄関に立たせてあげたくなる。』

と、子どもへの共感と深い愛情が保育の中心であることを、

『「池袋で乗り換えるんだよ。」小生意気な坊やの言葉が続く。この坊やにこんなことがわかるのかしら、ちょっとためして見たくなって「それからどういくの」と、うながしてみる。「それから

ね、たくさんたくさん行くんだよ。新宿の三越だもの。」池袋から四つめの新宿でも、この坊やにはたくさんたくさんなのだろう。通りすぎた電車のひびきで三越行きを連想したこの子がいじらしい。』

と、更に子どもを知ろうとして働きかけて行くことが、子どもの理解をすすめ、かかわりを深めて行くことを。

こうした基本的なことが具体的事実の中で随所にみられる。一般的な理屈で述べられていないために、うっかりすると読み流してしまうかもしれないが、ひとつひとつのことばづかい、心の動きに保育の中核があることに気づいて心にとどめると、素晴らしい保育の技術もまた習得できよう。

現在は、幼児の行うひとつずつの行為の意味を見出し、そこから保育をすすめることが大切であると理解されながらも、こうした実践はむずかしいとされている。それはなぜであろうか。

本書でごく自然なこととして行われていることがなぜ実践できないのであろうか。このようにみずみずしく幼児の活動をとらえ、豊かな活動をひき出すことができないのはなぜか。また、保育の場は、うごく、さわる、つくる、感ずるという具体的な出来事から成り立っていることが忘れられ、個々の行為や心のひだが切り捨てられてしまっているのはなぜなのか、こうした問いへの答を著書の姿勢の中から見出すことができるのではないだろうか。

人が自分の在り様を大切にせず、保育者が自分の感受性や行動を磨く努力を放棄して、科学的事実（と称せられる）や学問的な理屈に頼り始めた時から、こうした誤りが生じたであろうことが。

夏休みについて次のような文がある。

『まず疲れた肉体を充分にやすませてやりたい。よくまあきょうまで働きつづけたものだとわが手足ながら撫でさすってやりたい。』

また、お子さま方と離れて暮している時に、おみくじの「凶」に不安にかられて夜半に会いに行かれることが書かれている。

このように、自分の心に素直に反応しつつ、自分が生身の人間であることを受け入れ、いとおしみながら、自分と、自分にかかわる人達のために愛情を注ぐことから、人の心をとらえる的確さが生れ、努力への意欲が自然に出てくるのであろう。

現在の保育界の混迷が「保育者」を育てずに保育の技術や理論を求めようとしたことにあると思い知らされる。なぜそんなに急

がねばならなかったのかと悔いる思いがする。人を育てることは、育てる側が自分を振り返りつつ、自分を成長させ、その自分を子ども達に分け与えて行くことであること、その原点に早く返らなければならないと心が急く。

まがいものの多い世の中で、本物の大切さも心したいと思う。本物（私の本物、自然の本物）が本物の人間を育てることをいくつかのエピソードを通して教えられる。物については本物を与えることはむずかしいにしても、本物の心は与えることができるだろう。

『仕事のことは何もかも忘れて旅に出ましょうと同じ職場仲間で早春の鞍馬路をぶらぶらと歩いたことがあった……。「あらはこべよ。おいしそうね。幼稚園のインコや十姉妹にたべさせたいわね。」……〝何もかも忘れて〟ということは女性は、殊に子どもを育てる土壌のような保育者にはでき難いことらしい。』

常に子どもとつながっている、つながろうとするいつわらざる心。

『風花が舞う静かな夜更に私は決意した。どんなに誹られようとも、自分達の真実の生活を始めるために、子どもたちにも故郷を捨てさせ、自立の生活に向おうと。』

自己をいつわらないことによって、自己を全うするための知恵や力が溢き出ること、それはおとなも子どもも同じであること、本物の自分の生きる喜びや苦しさを子ども達と共に味わうことが教育することであることをあらためて考えさせられる。

保育の道を歩む者が、本物の保育者の声を聞かずに、一体何を聞こうというのであろうか。「保育」が「保育学」として他の学問と肩を並べようとする時、やみくもに他領域の既成の理論に依存して、己れ本来の在るべき姿を見失おうとしている今、本書の示していることの意味は大きい。

今後こうした保育者の手になる書物が後に続くことが、保育界のためにも、著者の永年の努力に報いるためにも待ち望まれる。

（郡山女子短期大学）

＊　＊